國學院大學北海道短期大学部
図書館だより
令和2年4月1日
No.18

展示にイベントに、盛りだくさんの活動でした！

図書館ワークスタディ
国文学科1年　相田瞳

今年の図書館ワークスタディの大きな仕事は「教員おすすめ本展示」と「トショカン・クエスト」です。

「教員おすすめ本展示」は、前年度のワークスタディの企画を引き継いだものです。短大のHPに紹介されている各学科の先生方に3つのテーマ（①子どもの頃に読んだ本 ②学生時代に読んでいた又は読みたかった本　③趣味・特技に関する本）に沿った本を選んでもらい、展示しました。子どもの頃に読んだ本では『怪盗ルパン』や『シャーロック・ホームズの冒険』など、何冊か同じ本が選ばれました。私たちの年代でも読んだ人は多いはず。やはり名作は何年たっても色あせないなと感じました。また趣味・特技に関する本では、その先生らしい本が挙がった一方で「そんな趣味が！」と驚くような本があったりと、先生方の意外な一面に触れられました。

「トショカン・クエスト」は、今年度のワークスタディが企画しました。図書館を舞台に、3人1組のグループをつくり、図書館のルール、北海道や短大・本に関することなど15問の問題を制限時間内に解いてゆき、最終問題になっている一冊の本を探し出してもらうというものです。今年の1月18日（土）に開催し、18名の学生が参加してくれました。スマートフォンはこちらで預かり、問題を解くために使用していいのはWebOPACと図書館の本のみ。問題のヒントは図書館の本に書かれているので、参加者は本を求めて図書館中を探索しました。インターネットの使用制限や開催時期など反省点は多々ありますが、参加者の皆さんにはとても楽しんでいただけました！4月には、問題の解答一覧や使用した本を展示します。ぜひ見に来てください！

【図書館からのご案内】

○参考図書や館内閲覧に指定されている本は貸出ができません。

○入館する際や貸出手続きの際に学生証・利用証が必要となります。忘れずにお持ちください。

○延滞している場合には、図書の貸出はできません。また、延滞した際には、すべてを返却し終えても、翌日まで貸出不可となります。

※詳しくは利用案内をご確認下さい。

【発行】
國學院大學北海道短期大学部図書館
滝川市文京町3丁目1番1号
TEL　0125-23-4111 ／ FAX　0125-23-5590
http://www.kokugakuin-jc.ac.jp/

○開館時間
月―金 9:00―18:30
土　　9:30―16:00

○休館日
日・祝日、他に大学指定の休日

國學院大學北海道短期大学部は、高校生以上の地域の皆様に図書館を開放しています。利用ご希望の方は、運転免許証など、ご自身を証明できるものをお持ちのうえ、カウンターで利用登録をしてください。詳細は、図書館にお尋ね下さい。

私の読書歴

学長　平野　泰樹

最初の本の記憶は漫画本で、猿飛佐助が主人公であった。幼稚園の頃には、午睡前の母にエライ・ホイットニーという米国人発明家の伝記を繰り返し読んでもらった。

小学生になると加速度的に文字が読めるようになり、図書館の童話や児童書、父の買ってくれた児童文学書に親しんだ。中学生から高校生にかけて、読書は多様なジャンルに広がり、欧米の純文学、恋愛小説、ミステリー、サスペンス、ハードボイルド、SFなどを文庫本で買って読み漁った。幾つか挙げれば、ハードボイルドに新境地を開いたハドリー・チェイスの『ミスブランデッシュの蘭』、軽妙な短編やSF小説の名手フレドリック・ブラウンの『真っ赤な嘘』、『73光年の妖怪』、なかでもSF小説の金字塔と個人的に確信するヴァン・ヴォークト『宇宙船ビーグル号の冒険』は超能力を持った四つの宇宙生命体との死闘を宇宙生命体の視点から描く名作である。作者の想像力の豊かさと斬新さに、残りページが少なくなるほどに悲しくなった。

高校時代は友人や先生の影響で純文学に傾倒した。第一次世界大戦前後の仏名家の兄弟の生きざまと悲劇を描いたデュガール『チボー家の人々』、登場人物の饒舌と心理に圧倒されたドフトエスキー『白痴』、『罪と罰』、アンドレ・ジッド『法王庁の抜け穴』、『一粒の麦もし死なずば』、悲恋小説の最高傑作（個人的に）ピエール・ロチの『氷島の漁夫』、本当は残酷な『グリム童話集』全巻も読破（？）した。また、柴田錬三郎『眠狂四郎』シリーズに、一話完結の連作短編小説の面白さを堪能した。大学生になると、夏目漱石、森鴎外、芥川龍之介ら近代文豪の作品を読むようになった。司馬遼太郎の歴史小説『国盗り物語』、『坂本龍馬』も読み耽った。近代文芸評論の確立者・小林秀雄の『ドフトエスキーの生活』では、それまでの文芸評論の概念を打ち砕かれた。

大学院以降は洋書・和書の法律書と格闘する日々となったが、博士論文を出版した50歳頃から再び小説を手にするようになった。笹沢佐保『木枯し紋次郎』全巻、藤沢周平も『暗殺の年輪』を初め短編のすべてを読んだ。近年では乙川優三郎の『生きる』、『武家用心集』に魅了された。乙川氏は、現在、現代小説に転向し、『トワイライト・シャッフル』、『ロゴスの市』など優れた作品を執筆している。今、最も読み続けたい作家である。

これまで読んできた小説の多くは文庫本であるが、今なお八百冊ほどが手元に残っている。教養書の類は多くない。顧みるとさしたる読書歴ではないが、それでもこれらの本は私に至福の時間を与えてくれた。その意味で、私にとって読書とは妻とともに人生の伴侶である。

令和元年度の図書館

令和元年度　蔵書数（令和2年3月31日現在）

合　計	和　書	洋　書	視聴覚
82,898冊	74,855冊	6,905冊	1,138点

和書995冊、洋書26冊、視聴覚資料5点を新たに受け入れ、令和2年3月31日までの蔵書数は上記のようになった。

和書の内訳は、固定資産図書43,221冊、教育研究図書31,634冊。洋書は、固定資産図書5,422冊、教育研究図書1,483冊。視聴覚資料は、固定資産183点、簿外955点となった。

また、年度末に5年間所在が不明である紛失図書や複本、書庫狭隘化のため不要となった図書672冊を除籍した。

私たちの　読むヨム

図書室の特集コーナー

国文学科1年　佐々木　風花

高校時代読んだ本で、一番印象に残っているのは、宮部みゆきさんの『ソロモンの偽証』です。2015年に映画化されていて、作品名と、校内裁判の話、ということだけ知っていましたが、なかなか手を出せずにいました。

高校の図書室でたまたま、実写化した小説の特集コーナーが設置されていて、そこにソロモンの偽証があり、読んでみようかなと、軽い気持で手に取りました。

私は、映画化や、ドラマ化された小説を読むことが多く、話の内容を把握してから、小説を読むのが好きでした。ですが、ソロモンの偽証は、詳しい情報も無く読み始めたので、なかなか進みませんでした。裁判が行われるのは知っていたので、生徒たちが裁判を行うのを楽しみに読み始めたら、第一部は、事件の説明が続き、肝心の裁判が始まらず、ページをめくる手がなかなか動かなかったのをおぼえています。

なんとか第一部を読み終えて、第二部に進むと、だんだんと読むスピードが上がっていきました。第二部に入ると、話の内容が理解できるようになり、そこから読み終わるまでは、速かったです。第一部を乗り越えれば、物語に引き込まれる楽しさが待っているので、ぜひ最初から最後まで読破して欲しい本です。

図書局の方が、特集コーナーを作ってくれたおかげで、読むことができた本が他にも沢山あります。小説だけでなく、普段手に取らないような写真集や、ビジネス書なども紹介されていて、手に取る本の種類に幅を持たせてくれました。

それ以来、町の図書館などでも、特集コーナーをよく見るようになりました。当たり外れはありますが、何を読もうか迷っている時は、図書館の方のオススメを読むのも楽しいと思います。

本学に所蔵していない本を読みたいときは、次の方法があります。詳しくは職員までお尋ねください。

①購入希望（リクエスト）を提出する

本学学生・教職員に限りリクエストを受け付けております。ただし、すべての本が入るわけではありませんので、ご了承ください。また、入るまでに時間がかかることがあります。

②他館から取り寄せる

道立図書館などから取り寄せて借りることができます。

③公共図書館・大学図書館に行く

学生証・身分証明書・紹介状などが必要となる場合があります。

岸田 緑渓 ほか 著『英語の謎』

総合教養学科2年　青木　大輝

私は短大の先生に薦められて『英語の謎　歴史でわかるコトバの疑問』（岸田緑渓他著、角川ソフィア文庫）という本を読んだ。本書の内容は英語を学習する際に生まれる疑問を、英語の歴史などから紐解いて解説しているものである。誰もがどうしてこうなるのだろう？と思う疑問が多く取り上げられている。その多くは中学校の先生に聞いても、「そういう風になっているからそう覚えるんだ」と言われるようなものばかりである。

具体的に答えられている疑問は、なぜ“you”は複数形でも“you”なのかといったものから、“have　to”はなぜ「しなければならない」といったものまである。このような英語の謎について、全部で79のQ&Aが書かれている。謎の答えが知りたい人はぜひ手に取ってみてほしい。

私は英語を専攻している。学習の際にも本書は役に立った。英語を学習する際に、文法や単語の意味などは、「法則だからこういう風に決まっている」というように教えられることが多く、理由まで語られることは少ない。それに比べてこの本は歴史的背景を含めて解説しているので、単純記憶でなくストーリー記憶となり、覚えやすい。暗記ではなく、理解となるのである。

私自身、読書をすることはかなり久しぶりのことであった。しかし、一度手に取るとどんどんと読み進めていくことができた。普段の学習のヒントや、有益な情報が得られることもあるので、皆さんも普段の学習の息抜きとして読書をしてみてはどうだろうか。私もこれからは、読書と付き合っていきたいと考えている。

教育について考える
～学校の「当たり前」をやめた　を読んで

幼児・児童教育学科1年　正野　智大

私には、小学校の先生になるという夢がある。その夢の実現のために、教育に関する知識をたくさん吸収することで初等教育に活かしていきたいと思い、本を読んでいる。

紹介するこの本には、今の日本の学校では、学校が担うべきである「本来の目的」を見失っているのではないかと書かれている。私たちは、いつかは社会に出ていかなければならず、その中で生きていかなければならない。生き抜く力がなければ、時代の変化のスピードや振れ幅に追いつけなくなってしまう。そうならないように、学校では「自律」する力を身につけさせていく必要があると作者の工藤勇一氏は考えている。

私はこの本を読んで、短期の目標だけでなく長期の目標を持つことが、初等教育だけでなく人生において大切であることを学んだ。例えば、今まで学校に通っていた時、宿題を出されると、私はそれをこなしていただけで、ただ早く終わらせてしまおうと考えていた。しかしそれだと、自分が分からない問題が出たときに深く考えることなくすぐにその問題を飛ばしてしまう可能性が高くなってしまう。そういうやり方を子どものうちからやってしまうと、学校の本来の目的である「社会の中でよりよく生きていけるようにする」からかけ離れていってしまう。

教師は、子どもが分からない問題に直面した場合に、そこであきらめたり、誰かにどうやって解くのかと聞くよりも、まずはその問題について自分で考えるように指示を出す必要がある。そうすることで、子どもたちに「自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する資質」つまり「自律」する力を身につけさせることができる。

目先のことだけにとらわれるのではなく、常にその先を見据えながら考え、行動することが重要であるということが、この本を読めば感じることができるので是非読んでみてほしい。